

おじいちゃんとうたし

成瀬中学校三年青柳和虎

今日本は五人に一人は高齢者という多さで、

元気に働いている人もいれば、体が不自由な

人もいて、年齢や性格も皆違うから「高齢者」

をひとくくりに考えるのは難しい。そこで私

は自分の友達のおじいちゃんとかかわりを

通じて、高齢者の人権について考えてみよう

と思った。

私には九五歳の一人暮らしをしている近所

の友達がいる。三歳の時から十二年の付き合い

いになる。私はよく一人で遊んでいたもので、

声をかけてくれたのがきっかけだと思う。

幼稚園の時、私とおじいちゃんとは自転車で

追いかけてっこをしたり、家でおやつをもらっ

たりして毎日のように遊んだ。当時彼は気難

しいことで有名で近所の人たちから避けられ

ていたので「あの人と遊ばせて大丈夫？」と

近所から言われていたそうだ。

小学生になると二人で色々な場所へ出かけ

た。近所のスーパー、ケーキ屋、ラーメン屋。
東京スカイツリーや花火大会にも行った。お
じいちゃん、競馬や株もするから、それも少
し教わった。そのころには、近所の人から「
以前は家の前に車を少し停めただけで怒鳴っ
てくるような人だったのに、最近は笑顔で話
しかけてくる、人が変わったようだ」と言わ
れるようになっていた。もしかして「僕のお
かげかも」とも思いうれしかった。
中学生になってから彼は二回大きな病気に
なり手術や入院をした。体も弱って、一緒に
出掛けることはないが、買い物に行つてあげ
たり、スマホの使い方を教えたり、私のでき
ることが増えていき、自然に手伝うようにな
った。小脳梗塞になったときに耳や目が悪く
なつてしまい、インターホンも聞こえないか
ら、私だけが知っている入口からおじいちゃ
んに声をかけることもある。私は、介護サ
ビス、民生委員、近所の人とおじいちゃんを
つなぐ役になった。おじいちゃん、少しのお

小遣いをくれたり、お菓子をくれたりするが
なくともよい。先日、おじいちゃんから「体
調が悪いからすぐに来てほしい」と電話が来
て、私と母は急いでおじいちゃんの家に向
た。どうやら介護サービスに電話したつもり
で間違えたらしく「虎君の家に掛けてしまっ
て申し訳ない」と繰り返していた。そんなこ
とより彼の体調を心配しながら、私は介護サ
ービスに電話をし、息子さんの留守電に伝言
を残した。
おじいちゃんは救急車で病院に連れて欲し
がつていたが、介護の人が来て、簡単な健康
チェックすると、救急車を呼べないといわれ、
様子を見ることになった。私は、福祉サービ
スにはそういう決まりがあるのか、と少し残
念な気持ちで帰宅したが、気になって、許可
をとり、彼の部屋に見守りカメラを置いた。
母とモニターを見ながら「さっきまでうちわ
であおいでいたのに動かない、寝てるのかな
まさか」と胸のあたりをズームして「動いて

る、良かったー」などとほつたりして
る自分たちに笑ってしまった。その後体調は
回復せず、結局おじいちゃん入院すること
になった。私がおじいちゃんと友達でいるの
は、一緒にいて楽しいからだ。小さい時はお
菓子をもらえたからでもあったし、親ではな
い人と出かける冒険のような気持ちもあった
と思う。今は昔世話になった恩返しの気持
ちもあるが、特に優しく接するわけでもない。
「おじいちゃん」という高齢者の人権は、充
実した介護サービス、高齢者同士や地域の人
との交流、家族との同居よりも、競馬や株、
好きな買い物など、生活の自由だと思う。私
と過ごすことも生活の一部だったと思う。
彼と私の年の差は八〇歳、長く生きた経験、
知識、遊び方など、私や私の親も知らないこ
とが多い。彼からそういうものを沢山もらっ
たし、私からも沢山あげたと思う。人は与え
られるだけでは相手に申し訳ない気持ちにな
って、遠慮してしまう。自分も相手に与える

ことで対等な気持ちで接することができ。
欲しいものも望むことも人それぞれだから、
配慮せずに伝えて、してもらうことを当たり
前と思える健全な関係が、元気に生きる活力
になると思う。私はおじいちゃんとの十数年
を通して、高齢者の人権とは、そういうこと
だと考える。
私とおじいちゃんは相性が良かったのだろ
う。互いに遠慮しないで与え合った。楽しい
ことを一緒にしたし、わがままを言って叱ら
れたこともある。そんな関係をおじいちゃん
は喜んでくれていると思う。おじいちゃん
いつも、私が大学生になるのが楽しみだと言
っている。その時は盛大に祝ってくれるそう
だ。昨日入院している彼を見舞いに行ったが、
元気になっていて安心した。退院したら施設
にしばらく入るらしいが、時々会いに行つて、
また一緒に楽しい時間を過ごそうと思う。私
の四年後の入学祝を楽しみにしている。